

## フォークナーのリライティングの方法と歴史意識： 『征服されざる門々』における銃のモチーフ

小谷, 耕二  
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5391>

---

出版情報：言語文化論究. 7, pp.1-11, 1996-03-01. 九州大学言語文化部  
バージョン：  
権利関係：

## フォークナーのリライティングの方法と歴史意識

—『征服されざる人々』における銃のモチーフ—

小 谷 耕 二

### I

従来 *The Unvanquished* (1938年) の評価はかんばしいものではなかった。そのもとになった短篇の多くが大衆雑誌 *The Saturday Evening Post* に掲載されたという事情もあって、複雑難解をもって鳴る Faulkner の作品群のなかではもっとも読みやすいものなのだが、逆に重厚さに欠ける憾みがある。大作 *Absalom, Absalom!* (1936年) の陰で気楽に書き流された作品とみなされるのが相場であった。しかし、『サタデー・イヴニング・ポスト』掲載の五篇と *Scribner's Magazine* に発表した一篇に、書き下ろしの“An Odor of Verbena”を加えて長編小説にまとめる際に、フォークナーは文体面での細かな修正のほかかなりまとまった量の加筆をおこなって、全体としての整合性とあたう限りの思想性を達成すべく腐心している。<sup>1)</sup>したがって、気楽に書き流された作品として、気楽に評価しておけば事足りりというわけでもないのである。

とはいうものの、加筆修正が完璧な成功を取めているわけではなく、大小いくつかのほころびが見えることも事実である。とくに最終章の「美女桜の香り」は作品の残りの部分とそのトーンが著しく異なっている。雑誌掲載部分のトールテール風の喜劇性と「美女桜の香り」の抑制された深い緊張との間には、明白な断層がある。この整合性の欠如はこれまで作品構成上の欠陥とみなされることが多

かった。これは作品分析の手法が概していわゆる新批評に基づくものであったことに由来していよう。つまり作品を自律した一個の世界とみなし、その枠組みのなかで作品内の諸要素がいかに緊密に織りなされて全体の秩序を構築しているかを明らかにすることに分析の眼目があったのである。この新批評は、フォークナーに頻出する異質な要素の併置や対位法的構成ですら、究極的には作品全体の秩序に資するものであるかどうかを基準にして、評価を下していたといえるだろう。そうした観点からすれば、異質な要素の整合性を欠いた混在は、当然全体の統一的秩序にそぐわぬものとして欠陥の烙印を押されることになる。フォークナーの発掘およびフォークナー研究の隆盛は新批評によって先導されたことを考えれば、その功績にははかりしれないものがある。しかし作品の自律性という概念自体が崩壊ないしは深い疑義に晒されているように見える昨今、異質性の併置や対位法を論ずるにしても、それをスタティックに捉えるのではなく、ダイナミックなものとして考察する必要があるだろう。作品秩序の安定的維持という至上命令のもとに統御された構成要素としてではなく、秩序を覆す潜在力をひめた力動的な仕掛け・装置として、異質性の併置や対位法を読み換えねばならないのだ。

こうした観点に立つとき、フォークナーの小説制作がリライティングという方法に基づくものであることが明らかになってくる。かつてフォークナーは、*The Sound and the*

*Fury* (1929年)の生成について、それが木に登っている Caddy Compson のイメージから始まり、Benjy の内的独白、Quentin の内的独白、Jason の内的独白と順次書き継いで、なお満足し得なかったために、全知の視点からの最終章を書き加えたのだと述べたことがある。同じ物語を四度書いたというのである。<sup>2)</sup> また『アブサロム』では、最初 Miss Rosa とクエンティン、次いでクエンティンと Compson 氏、最後にクエンティンと Shreve の対話という形で作品が構成され、Thomas Sutpen の興隆と没落の物語が、Mississippi 社会の草創期から南北戦争、再建時代という歴史の流れを背景にして、その全貌を現わす仕組みになっている。いずれの場合も、物語の進展に伴って、新たな視点の呈示が新たな事実の発見や解釈をもたらし、後続するテキストが先行のテキストを書き換えている。そこに見られるのは単なる異質な諸要素の併置や対照ではなく、それらの要素相互間の力動的な関係なのである。フォークナーの場合、書くという行為はこうしたダイナミックな関係の網の目を紡いでいくことであり、それが先行のテキストの意味を、あるいははずらしあるいは覆しながら増殖させていくという意味において、リライトिंगと呼ぶことができよう。

小論では、「美女桜の香り」が上述の意味でのリライトिंगの機能を果たしているという立場から、作品全体を貫いている銃のモチーフに焦点を絞って、『征服されざる人々』を考察する。「美女桜の香り」を作品全体と齟齬をきたす重大な構成上の欠陥と解釈するのではなく、フォークナー特有の力動性を孕んだ対位法的構成と見るのである。したがって、リライトिंगとはいっても、ここでは長編小説に仕立てる際にフォークナーがおこなった加筆修正（つまりテキスト自体の改訂）に力点が置かれるのではない。

## II

『征服されざる人々』の第一章をなす“Ambuscade”にさっそく銃のモチーフが現われている。ここでは Bayard Sartoris は遊び相手の黒人少年 Ringo と南北戦争ごっこに興じる12才の少年である。この二人の遊びの世界に現実の戦争の影が忍び寄ってくる。地面に描いた地図上の、木の切れはしで作った Vicksburg が、リングーの叔父で戦争による解放を期待している Loosh に崩されることで、現実のヴィックスバーグの陥落が暗示され、北軍がすでに近くまで迫っていることが匂わされる。事実、一時帰還した John Sartoris 大佐の指示で、サートリス家では家畜を避難させておくための柵を川沿いの低地に作り、銀器を果樹園に埋めて隠す。しかし、ときおり帰ってくる大佐にロマンティックな英雄の姿ばかりを見ていたベヤードに事態の深刻さが痛切に感受されるべくもなく、やがて実際に北軍が姿を現わすと、彼はリングーと屋敷からマスカット銃を運び出し、北軍めがけて引き金を引く。そして屋敷に逃げ帰った二人は、毅然たる態度で追っ手の北軍兵士と将校に相対する祖母 Rosa Millard (Granny と呼ばれる) のスカートに隠れて、難を逃れる。そして、北軍が引き揚げたあと、屋敷に逃げ帰ってきたときに使った「あん畜生を撃ったんだ (“We shot the bastud!” [27])」<sup>3)</sup> という下品な言葉使いをグラニーに咎められて、石鹸で口を洗わせられるのである。

このエピソードでは、敵への発砲という行為は戦争ごっこという遊びの世界の延長線上に生じたものである。幸い、馬を一頭負傷させただけで済んだこともあり、発砲行為自体の重大さは捨象され、話の焦点は、スカートの蔭に逃げ込むという軽妙な着想や、北軍将校 Nathaniel Dick 大佐のまるで南部騎士道を地でいくような紳士ぶり、グラニーの南部

貴婦人としての毅然たる態度、それに最後のアンチクライマックス的なお仕置きに移っている。フォークナーは改訂の段階で、成熟したベヤードの視点からの語りを導入し、それによって物語が少年の眼のみから過度にロマンティズムに彩られるのを避けているのだが、<sup>4)</sup> それにもかかわらず、全体として物語が愉快で口当たりのよいオブラートにくるまれている印象を禁じ得ない。いかにも『サタデー・イヴニング・ポスト』向きの俗受けする話になっているといつてよい。

戦争を背景としていながら、戦争の惨劇がほとんど捨象された一種牧歌的な世界は、第二章(“Retreat”)と第三章(“Raid”)においても持続している。戦況が悪化し、らばと銀器を盗まれ、さらには屋敷も焼かれてしまったベヤードとリンゴーとグラニーの三人は、らばと銀器を取り戻し、また自由の地ヨルダン河をめざす黒人の群れに加わるべく、サートリス家を後にしたルーシュと妻のPhiladelphlyを連れ戻すために、旅に出る。そして首尾よく頼りにしていたディック大佐に会い、彼を通じて、盗まれた財産の返却を命ずる、将軍の署名入りの文書を手に入れることになる。ところが、グラニーが返却を求めたのは、“The chest of silver tied with hemp rope. The rope was new. Two darkies, Loosh and Philadelphly. The mules, Old Hundred and Tinney.”(109)なのに、申し出を書き取った伝令兵の間違いで、その文書には、“Ten (10) chests tied with hemp rope and containing silver. One hundred ten (110) mules captured loose near Philadelphly in Mississippi. One hundred ten (110) negroes of both sexes belonging to and having strayed from the same locality.”(112)と記されているのである。そしてこの文書のおかげでベヤードたちは、結局百頭余りのらばと馬、そして数十人の黒人を敵から取り戻すことになったのである。ここでも、

北軍に対する二人の子供と老女のユーモラスな「急襲」がトールテールの装いのもとに描きだされている。

### III

次に銃のモチーフが現われるのは第五章“Vendée”においてである。第三章での文書事件に味をしめた三人は、今度はリンゴーがどこからか手に入れてきた北軍の軍用便箋を使って、将軍の署名入りの文書を偽造し(前章で敵を出し抜くのに才覚を見せたリンゴーは、ここでは将軍の筆跡の模倣の名人となっている)、北軍の部隊かららばを騙しとっては、らばの尻に捺されているU. S. という焼印を焼き消して、それをまた北軍に売りつけている。この詐欺行為にはAb Snopesが一枚噛んでおり、アブの手っ取り早い金儲けの話にのったグラニーは、Grumby's Independenceという略奪をこととし、殺人をも辞さない輩のもとへのりこんでいき、結局殺されてしまう(第四章“Riposte in Tertio”)。そこでグランビー一味を探しての追跡行が始まる。この追跡にはUncle Buckも加わっている。途中ベヤードは、縛られて仲間から取り残されていたアブを打ちのめす。やがてグランビーの不意の襲撃による負傷と持病のリューマチの悪化のせいでバック小父さんは引き返すが、なおもベヤードはリンゴーと旅を続け、ついにグランビーを追い詰め、逃げ出そうとしたところを背後から銃で射殺するのだ。そのうえグランビーの右腕を切り落とし、それをグラニーの墓標に括りつけて、復讐を成就するのである。

ここではユーモラスな冒険譚と、教養小説(ビルドゥングスroman)風の成長物語の構図が交錯しており、銃のモチーフはその両者を繋ぐ蝶番の機能を果たしている。偽造文書をめぐる冒険譚では、ベヤードよりもむしろリンゴーがその臨機応変の才知を発揮して主動

的な役割をはたしている。話自体も相変わらずトールテールめいており、二人の少年と老女による、北軍相手の一種の愉快的ゲリラ戦となっている。グランビーへの復讐譚になると、焦点はベヤードに移り、話のトーンもやや悲劇的な色合いを帯びてくる。*Light in August* (1932年)に顕著に見られたような、フォークナー特有の明暗の対照的併置がここにも顔を覗かせている。とはいっても、ベヤードのグランビー殺害と右腕の切断という残忍な行為も、喜劇的要素のかわりに悲劇的側面が誇張されて前面に出ている一種のトールテールとして、おおもとはまだ冒険譚の延長線上にあると見ることができる。

それにもかかわらず、トールテールのオブラートにくるまれているが、物語の背後には南北戦争終結前後の南部の世情が厳然として描きこまれている。サートリス家の財産は略奪され、屋敷も灰燼に帰している。自由を求めて狂おしい行軍を続ける黒人の群れがいる一方で、白人、黒人をとわず、生活の糧をなくし、路頭に迷う老人、女子供がいる。グランビー一味のように、戦争の混乱にまぎれて脅迫や拷問といった手段で財産を略奪していく者もいる。グラニーは偽造文書で奪い取ったお金を困窮する農民たちに分け与えてやるのだが、こうした温情主義も戦争の荒廃とともに失われている。南部の男ならまさか白人女性を手にかけることはあるまいと考えて、グランビー一味のところへのりこんでいったグラニーは、惨殺される。ここでは南部女性の神話がもろくも崩れ去っている。そもそも南部貴婦人であるはずのグラニーが、温情主義に根ざすものとはいえ、スノープスマがいの詐欺行為に手を染めたこと自体、旧南部の価値観の混乱を暗示している。そしてこうした南部社会の荒廃は、「美女桜の香り」から振り返るときにいっそう鮮やかに、トールテールのなかから透けてくるのだ。

同時に「美女桜の香り」の視線によって、

冒険譚から成長物語の構図も浮き出てくる。ベヤードの復讐は少年から大人になるための通過儀礼であり、南部社会の掟の再確認の儀礼的行為でもある。グラニーの葬儀が終わるとすぐベヤードは、参列していたバック小父さんににピストルを貸してくれるよう申し出て、復讐の意志を明らかにする。彼は南部社会の掟の要求を満たし、一人前の男であることを証明しなければならないのだ。名誉と勇氣は、のちに彼が「美女桜の香り」のなかで述べているように、「自分自身と暮らしていく (“I must live with myself.” [240])」のために必要なのである。追跡の旅の途中、当初リンゴーが木の枝に曜日と日付を示す刻み目を入れていたが、やがて日付がわからなくなる。これは少年時代の時間の秩序がここで崩れていることを暗示している。また、バック小父さんがその追跡行に同行していることも注目してよい。彼はプア・ホワイトや黒人に対して温情主義的態度で接しており、サートリス大佐のよき理解者でもあって、南部の伝統を担っている人物である。後年の *Go Down, Moses* (1942年)において Sam Fathers が Ike McCaslin の精神的父親としてそのイニシエーションを導くように、バック小父さんはベヤードの成人儀式および南部社会の規範への参入儀式的介添え役とみなすことができるのである。

グランビーを殺すことで、ベヤードは復讐を果たし、首尾よくイニシエーションを成就するかに見える。しかし彼の復讐が儀礼行為として完全なものであったかどうかについては、フォークナーの筆致はかなり微妙である。グランビーは仲間の二人に突き出される格好でベヤードとリンゴーの前に姿を現わすのだが、ベヤードと対決する際に彼は銃を右手から左手に持ち替えている。James Hinkle と Robert McCoy の注釈書によれば、これは南部の決闘の形式に則った仕草である。ミシシッピの田舎の決闘の作法では、それぞれ拳

銃一丁を手にした相手同士が30フィート離れて対面し、二度発砲することが認められていた。撃つ順番はどちらからでもよかった。決闘開始の姿勢は、利き腕でない方の手で銃を握り、それを脚の横に垂らして、銃口は下に向けておくというもので、両者が二発撃ち終えるか、相手が倒れるまで、動いてはならなかった。グランビーが最初に二回発砲しているのだが、その後すぐに彼はベヤードにとびかかっており、この時点で決闘の形式は破られている。したがって、ベヤードがグランビーを背後から射殺したことも、不名誉なことではないと、ヒンクルとマッコイは述べている。もっとも彼らは、二人の間の距離は30フィートもないことは明らかであり、銃の扱いに手慣れた者がそれくらいの距離で人間を撃ちそこなうことはほとんどありえないことを考えれば、グランビーはわざと狙いはずし、ベヤードから銃を奪い取ることで復讐を免れようとしたのだろうと、推測している。<sup>9)</sup> とすれば、あたかも狩猟でもあるかのように、それも背後から仕留めることに、行き過ぎではないかという割り切れない印象が残るのも無理のないことのように思える。

この印象はベヤードがグランビーを撃つとき、自らの意志で狙いを定めているのではなく、むしろ、無意識に手が動いているという感じを与える書き方によっても生み出されている。

Then I was free. I saw Ringo straddle of Grumby's back and Grumby getting up from his hands and knees and I tried to raise the pistol only my arm wouldn't move. Then Grumby bucked Ringo off just like a steer would and whirled again, looking at us, crouched, with his mouth open too; and then *my arm began to come up with the pistol* and he turned and ran. He shouldn't have

tried to run from us in boots. Or maybe that made no difference either, because *now my arm had come up and now I could see Grumby's back* (he didn't scream, he never made a sound) *and the pistol both at the same time and the pistol was level and steady as a rock.* (183; my italics)

生死のかかった局面で、わずか15才のベヤードは当然無我夢中であったはずだから、こうした書き方はむしろ自然であるかもしれない。それにもかかわらず、成長物語という観点から見た場合、このみずからの意志の積極的関与の欠如は、この場面が決定的な転回点であるだけに、やや奇異な感じを否めないように思う。この点で、それは典型的なイニシエーションの物語である“The Bear”のなかで、アイク・マッキヤスリンが荒野の精神の具現である熊と対面するために、みずからの意志で文明の利器である時計と磁石を放棄するのと対照的である。それに何よりも、後述する「美女桜の香り」でのベヤードの明確な暴力放棄の意志と、それは画然たる相違を示している。

さらに、グランビーの死体をグラニーが殺された綿の圧搾工場の戸に釘づけにし、その右腕は切り落として持ち帰り、グラニーの墓標に括りつけるという過度に残酷な行為をどう解釈するかという問題もある。<sup>9)</sup> このエピソードはあくまでもトールテールの冒険譚の枠組みのなかでの出来事であって、トールテールの論理によって物語自体が過激になってしまったのだと、ひとまず考えることもできよう。しかし、背後からの射殺によるイニシエーションの場合と同様、この残酷さは成長物語に内在する倫理性と著しく齟齬をきたしている。つまりここには冒険譚の枠組みと、その奥に透けて見える成長物語の構造とのギャップが露呈しているのだ。銃のモチーフがかろうじて両者の乖離を繋ぎ留めているの

だが、このギャップに、はからずもフォークナー自身の南部の伝統的価値観に対するアンビヴァレンス、冒険譚に見える愛着と成長物語に潜む批判との間の視点の揺れが反映しているように思える。バック小父さんはベヤードの行為をジョン・サートリス大佐の息子であることを証だてるものとして賞賛する。だが、問われねばならないのは、ほかならぬサートリス大佐が具現する南部の伝統的価値観そのものなのである。

#### IV

第六章“Skirmish at Sartoris”における銃のモチーフは、サートリス大佐にまつわるものである。再建期の北部主導の社会変革の一環として黒人にも投票権が与えられるが、サートリス大佐は、Jeffersonの連邦保安官選挙に黒人候補を立て黒人票を取りまとめようとしている北部人、二人のバーデンを射殺する。そして投票会場を自分の家に移し、Drusilla Hawkを選挙管理委員に任命して、選挙を執行行っている。サートリスらしく、相手に先に二度発砲させてはいるが、弁護の余地のない非合法の選挙妨害というしかないであろう。<sup>7)</sup>

このエピソードはサートリス大佐とドルーシラの結婚の経緯をめぐる喜劇と絡み合う形で物語られている。戦争で婚約者を失ったドルーシラは、女性であるにもかかわらず、サートリス大佐の軍隊に入り、男たちに混じっての生活を続けていた。戦争が終わって帰還してからも、大佐の家に身を寄せて、髪は短く切ったまま、男物の靴を履き、汚れて汗だらけの服装で、製材所で丸太を切ったりというような力仕事をしている。こうした有様を南部女性にあるまじき墮落とみなして、ドルーシラの母 Aunt Louisaを始め、Mrs Compsonや Mrs Habershamといった夫人連はドルーシラとサートリス大佐とを結婚させよう

とする。若い女がまだ若い大佐とひとつ屋根の下で生活してきたというのは、本人同士が何もなかったと言っても、世間では通用しないという訳である。そしてルイーザ叔母さんは「亡くなった主人と、今は子供の息子が大人ならば、たぶんピストルを突きつけて大佐に要求するにちがいないこと (“I must request what the husband whom I have lost and the man son which I have not would demand, perhaps at the point of a pistol” [203])」(下線は筆者)——つまり、結婚を二人に求めるのである。結局、ドルーシラは体面を重んじる夫人連の攻撃に屈し、結婚を承諾する。だが結婚式の当日、丁度その日が選挙の日ということで、彼女は式はそっちのけで大佐と行動を共にし、バーデン殺害の現場に立ち合う。そしてめっちゃめっちゃになった花嫁衣装姿で投票箱を抱えて帰ってくるのだが、そのドルーシラに、ルイーザ叔母さんは、バーデン殺しの委細などにはまったくおかまいなしに、まだ結婚していないのかと詰問するのである。バーデンとの戦いを制したサートリス大佐とドルーシラが、南部女性陣の軍門にくだっているのだ。

いやはや女というものは、という嘆きとも賛嘆ともつかぬフォークナーのつぶやきが聞こえてきそうな物語だが、風俗喜劇の趣向にカムフラージュされてはいても、銃のモチーフが一方で勇気や名誉と結びつきながらも、他方では抜きがたく暴力の伝統に根ざしていることは隠しようがない。12才のベヤードの遊びの世界で起きた北軍兵士への発砲事件も、15才のときのグランビー殺害も、またサートリス大佐のバーデン殺害も、すべてこの暴力の伝統に属し、それを持続させている。勇気や名誉のためといっても、どこまでが本当にそうなのか、どこまでが単なる暴力の正当化のためなのか、定かではない。南部女性のあるべき規範をふりかざし、あたかも銃を突きつけるかのように、大佐とドルーシラに結婚

を迫るルーザ叔母さん始め夫人連の行為もまた、体面維持のためには暴力など意に介さずという点で、暴力を育む下地を醸成していると考えられることもできよう。この伝統にどのような対処の仕方が可能なのか。それが最終章「美女桜の香り」で、24才になったベヤードが直面する問題であり、同時にそれはフォークナー自身が南部の歴史に相対する際に避けては通れぬ歴史意識の問題なのである。

V

銃のモチーフは「美女桜の香り」で劇的緊張を孕んでクライマックスに達する。この章に見られるベヤードの道徳的身振りは、すでに指摘したような、第六章までの物語の喜劇性のなかに潜在する成長物語の構図を照らしだすものとなっている。ミシシッピ大学で法律を勉強しているベヤードは、父が殺されたという報せを受け、これから自分が直面せねばならぬ状況のもつ意味を明確に見てとる。

*I remember how I thought. . . : At least this will be my chance to find out if I am what I think I am or if I just hope; if I am going to do what I have taught myself is right or if I am just going to wish I were. (215)*

彼自身が直接言及することはないが、おそらくはグランビー殺害について彼は深い省察をこれまでめぐらしてきたはずである。そして自分の取るべき道はすでに確定している。あとはそれが実行できるかどうかだけの問題なのだ。周囲の者たちは彼のグランビーに対する復讐を、サートリス一門としての名誉と勇気を示す行為として是認したばかりか、賞賛もした。しかし再び復讐を要求される状況に直面する今回、彼は過去の自分を乗り越えねばならないのだ。

ベヤードはまずドルーシラと対決せねばならない。すでに20才の時にトマス・サトペンとサートリス大佐の夢について語りあったとき、二人の立場には明白な違いがあった。ドルーシラは、「サトペンとは異なり、大佐は自分の血縁や昔の連隊の部下だけではなく、黒人や白人も含めて南部のすべての人間の自力による復興の夢を抱いていたと言う。そして、夢とは「弾丸をこめた一触即発のピストル(a loaded pistol with a hair trigger [223])」みたいなもので、その実現のためには人を殺すことも許されるのだと主張していた。一方ベヤードは大佐がこれまでに犯してきた数多くの殺人に疑問を抱いている。大佐がある山の住人を殺した事件では、大佐の弁明とは違って、自分が投票で連隊の指揮官からはずされたときの私怨が原因の殺人ではないかとベヤードは匂わせているし、サートリスの行動規範から見ても、「はやく撃ちすぎた(Father had shot too quick. [221])」大佐の方に落度があると考えている。また大佐は袖の下にいつもデリンジャー銃を隠し持っており、銃を隠したまま発砲する手際を彼に実演して見せたことがあったのだが、その様子をベヤードは「まるで自分のしていることを自分の眼から隠すかのように(as if he were hiding from his own vision what he was doing [223])」と評している。これは大佐の倫理的盲目を衝いた批判だが、この盲目／隠蔽のイメージは、カーペットバガーたちが黒人暴動を組織するのを防ぐために大佐がつくった「覆面」騎馬団での活動にも、大佐の不寛容な眼にはっている「食肉動物に見られるような透明な膜(that transparent film which the eyes of carnivorous animals have [231])」にも通底していよう。こうしたサートリス大佐の具現する暴力の伝統を拒絶するために、ただひとつだけ馬と勇気の匂いよりも強く匂いたつ美女桜の小枝を髪にかざした、「ギリシャの瓶に描かれた単純で儀式的な暴



力を司る巫女 (the Greek amphora priestess of a succinct and formal violence [219])」ドルーシラが差し出す決闘用の銃をベヤードは受け取らないのだ。

クライマックスの B. J. Redmond との対決の場面はグランビーとの対決と二重映しになっており、同時にそれを書き換えたものになっている。サートリス大佐は南部再建の事業として鉄道の建設に着手する。レッドモンドがこの事業の共同出資者となるのだが、両者に軋轢と反目が生じ、それが容易ならざる事態にまで至ってしまう。諍いの直接の原因は定かではないが、事態を悪化させてしまったのはサートリス大佐の傲岸不遜と支配欲である。彼はレッドモンドが南北戦争に軍人として従軍しなかったことをあげつらい、レッドモンドが事業から手をひいた後も、彼をそっとしておこうとはせず、完成した鉄道のお披露目の機関車でレッドモンドの家の前を通るときに、あてつけに汽笛の音をしきりに鳴らしたりしている。二人は州議会選挙にもともに立候補してあい争うのだが、その際にも不必要な侮辱を加えている。こうした経緯があって、結局大佐はレッドモンドに殺されてしまう。そしてベヤードは南部社会の掟により再び復讐行為を迫られるのである。

グランビーに復讐したときには、ベヤードは復讐という行為、およびそれを要求する南部社会の規範に対して無批判的であった。規範を自明のこととして受け入れ、その要求を満たすことができるかどうかが問題であった。そしてリンゴーの助けを借り、また背後から撃つというやや疑問の残る形で復讐を果たした。しかし今回は、少年時代には英雄として偶像化していた大佐に、彼は明らかに非を認めている。さらに規範が求める行動様式にも批判の眼を向けている。その批判の拠り所となっているのは、聖書の「殺すなかれ」という教えである。理由の如何を問わず、殺し殺される暴力の連鎖をどこかで断ち切らねばな

らない。その意志だけがレッドモンドとの対決の場でベヤードを支えているのだ。

So we did not speak; I just walked steadily toward him as the pistol rose from the desk. I watched it, I could see the foreshortened slant of the barrel and I knew it would miss me though his hand did not tremble. I walked toward him, toward the pistol in the rocklike hand, I heard no bullet. Maybe I didn't even hear the explosion though *I remember the sudden orange bloom and smoke as they appeared against his white shirt as they had appeared against Grumby's greasy Confederate coat*; I still watched that foreshortened slant of barrel which I knew was not aimed at me and saw the orange flash and smoke and heard no bullet that time either. Then I stopped; it was done then. (248-249; my italics)

グランビーがおそらくはわざと狙いをはずして二度撃ったのと同じように、レッドモンドは向かってくるベヤードに二度発砲するが、故意に狙いをはずす。グランビーの銃弾の音が聞こえなかったように、今度もベヤードにはレッドモンドの銃弾の音は聞こえない。「夢のなかを歩いているような (I seemed to walk in a dreamlike state in which there was neither time nor distance, . . . [248])」心理状態のベヤードは、ここでグランビーとの対決の場面を再び生きているのだといってもよいだろう。ただ今度は、幾多の殺人に倦み、「道徳的な掃除 (a little moral housecleaning [232])」をしようと考えようになった晩年のサートリス大佐と同じように丸腰でやって来ており、背後からどころか、発砲することすらない。そしてそれですべてが終わり、レッドモンドはオフィスを出ると、

そのままジェファソンを去っていくのである。

ベヤードはサートリスの一員としての名誉と勇気を暴力の放棄によって達成した。この行為は、暴力の伝統に則って復讐を行なった過去の自分自身を書き換える行為だといつてよい。同時にそれは南部の伝統的行動の規範を書き換える行為でもある。名誉はベヤードにとって自分が自分自身を放棄することなく生きていくのに不可欠なものであり、それを要求する南部社会の規範自体を彼は拒絶しているのではない。しかしその規範に根ざした勇敢な行動の在り方を彼は変えたのである。偶像化されたサートリス大佐が象徴する武勇とは異なった次元の勇気、伝統に黙従するのではなく、伝統を断ち切り、変えていく新たな一歩を踏み出す勇気を、ベヤードは示した。勇気に新たな定義を与えたのである。そしてそのことによって、過去にどう向き合うか、その姿勢の在り方を、彼は新たに呈示したのである。とりもなおさず、それは歴史意識を書き換えることにほかならなかった。

## VI

銃のモチーフを軸に『征服されざる人々』に限定してフォークナーのリライトの方法を考察してきたが、銃のモチーフはほかの作品群にも広げて検討することもできるように思える。『響きと怒り』のクエンティン・コンプソンは、妹キャディーの恋人 Dalton Ames に決闘用の弾をこめた銃を差し出されるが、受け取るのを拒む。そして殴りかかっていくのだが、知らぬ間にあえなく気絶してしまう。クエンティンにとってキャディーの性的墮落は南部の名門コンプソン家の衰退、ひいては南部の伝統的価値観の崩壊の象徴であり、ドールトン・エイムズはその崩壊をもたらした力と同一視されている。したがって、ここでの銃のモチーフは、崩壊を押しとどめ

ようと求めながらもそれができないクエンティンの無力をまざまざと照らしだしている。また『アブサロム、アブサロム!』では、クエンティン=キャディー=エイムズの基本的関係が、様々の内的外的要因を含めて、Henry Sutpen=妹 Judith=その婚約者 Charles Bon の関係に書き換えられている。だが、クエンティンとは異なり、ヘンリーは実際にチャールズ・ボンに射殺してしまう。チャールズ・ボンは異母兄であり、妹ジュディスと彼との結婚は近親相姦になってしまうのだが、ヘンリーはそこまでは譲歩できても、チャールズ・ボンに流れている黒人の血によって、種族混濁という事態が出来ることだけは許せなかったのだと、同じく近親相姦的愛情をキャディーに注いだクエンティン(『アブサロム』の中心的視点人物となっている)は推測している。ヘンリーはチャールズ・ボン殺害という手段で、種族混濁という南部の神話的禁忌の不可侵性を守るのである。このふたつの銃のモチーフが南部の伝統的価値観に密接に結びついているのに対して、*Sanctuary* (1931年)の Popeye の銃は、暴力の伝統の現代的墮落を象徴しているといつてよいであろう。『征服されざる人々』における銃のモチーフは、こうした文脈を踏まえながら、同時に、銃を放棄するという点で、それ以前の銃のモチーフを決定的に書き換えているのである。そしてそれは後年の『行け、モーセ』においてさらに書き換えられることになる。『征服されざる人々』では白人と黒人の関係というテーマは前面に出てきていないが、『行け、モーセ』ではベヤード=リンゴの関係は“Zack” Edmonds=Lucas Beauchamp の劇的対決という形にまで深化し、ベヤードとドルーシラの対話はアイクと“Cass” Edmonds の対話に姿を変えて、大きく発展する。そしてベヤードの銃の放棄は、アイクが荒野の主たる熊との出会いのために時計と磁石と銃を放棄するという行為に引き継がれ、

さらにはマッキヤスリン家の過去にどす黒くとぐろを巻いている、白人と黒人の間の血の混淆にまつわる罪の贖罪のためにアイクが家督を放棄するという行為にまで書き換えられていくのである。こうしたリライトの詳細については別の機会にゆずるとして、この簡略なスケッチだけからでもフォークナーがいかに銃のモチーフを対位的に書き換え、

深化させているか、またそれがいかに、過去を見据えることによって現在を理解し、位置付けようとする試み、すなわち歴史意識の問題と不可分であるかは明らかであろう。フォークナーのリライトとは単なるテキスト次元の書き換えではなく、歴史認識の探求の方法でもあった。

### 註

- 1) この改訂の実態、プロセス、効果等については、主として次の文献を参照。Michael Millgate, *The Achievement of William Faulkner* (Lincoln: Univ. of Nebraska press, 1963; rpt. 1978), pp. 164-170; Joanne V. Creighton, *William Faulkner's Craft of Revision: The Snopes Trilogy, "The Unvanquished," and "Go Down, Moses"* (Detroit: Wayne State UP, 1977), pp. 73-84; Joseph Blotner (ed.), *Uncollected Stories of William Faulkner* (New York: Random House, 1979), pp. 681-684; 渡辺利雄「William Faulkner と *Saturday Evening Post* — *The Unvanquished* を中心に」『ウィリアム・フォークナー資料研究批評』2巻1号(1979), 40-68; and John Pilkington, *The Heart of Yoknapatawpha* (Jackson: Univ. Press of Mississippi, 1981), pp. 189-215.
- 2) James B. Meriwether and Michael Millgate (eds.), *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner 1926-1962* (Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 1980), pp. 146-147, 244-245. フォークナーは Malcolm Cowley 編の *The Portable Faulkner* (1946年) に『響きと怒り』の“Appendix”を載せているから、それも入れれば、都合五回書いたことになる。
- 3) William Faulkner, *The Unvanquished* (New York: Vintage International; the corrected text, 1991), p. 27. 以下、この作品からの引用はすべてこの版に拠り、頁数は文中に記す。
- 4) Creighton, p. 74; Pilkington, pp. 196-197.
- 5) James Hinkle and Robert McCoy, *Reading Faulkner: The Unvanquished* (Jackson: Univ. Press of Mississippi, 1995), pp. 145-146.
- 6) Pilkington は、ベヤードのグランビー殺害が性格よりも出来事に依存しており、唐突で、メロドラマになっていると、批判している (Pilkington, p. 206)。ことによると、ここにはグランビーのような南部人の行動に対するフォークナーの憎悪が、知らず知らずのうちに表出しているのかもしれない。
- 7) サートリス大佐のバーデン殺害の理由は明示されていない。候補者に担ぎ出されたのが、以前 Benbow 家の馬車の御者だった Cassius Q. Benbow ことキャッシュ小父さんであり、彼が保安官として適任かどうかという問題もあり、ここにバーデンたちの強引さを見てとることもできよう。しかしそれによって大佐の行動が正当化されるものではない。

## Faulkner's Method of Rewriting and Historical Consciousness: The Gun Motif in *The Unvanquished*

Koji Kotani

The present paper is an attempt to elucidate Faulkner's method of rewriting by focusing on several gun episodes in *The Unvanquished*. In the last chapter of the novel, "An Odor of Verbena," Bayard Sartoris refuses to take revenge on B. J. Redmond for killing his father, Colonel John Sartoris, although he proves his honor and courage by confronting Redmond without bearing a gun. This act is an act of "rewriting" his two previous shootings; he fired a musket at Union soldiers when he was twelve-years-old, and shot Grumby to death at fifteen. The former happened as a part of his war play with Ringo, his black playmate, and the latter was an act of revenge for the death of his grandmother, Granny. Contrasting Bayard's choice of nonviolence with those two gun episodes, Faulkner shows that Bayard criticizes and tries to change the Southern tradition of violence. Therefore, Bayard's moral growth is accompanied by his successful search for a new pattern of behavior based on a new definition of honor and courage, which is also an act of rewriting the conventional form of historical consciousness into a new one.